

目的 環境の問題は、私達の生活行動のすべてとつながっており、その内容は広範囲であり多様である。大学では、教育はそれぞれの分野の専門家に任されていることから「大学における環境教育」は、まだ確立されていない現状である。しかし、環境の問題は多くの分野からのアプローチが可能であると同時に必要である。今日、講義名称に関わらず多くの分野で関連されていると考えられる。本研究は、講義の中での環境問題の取り上げ方の現状を明らかにすることを目的とした。

方法 環境の問題を講義で取り入れているかについてのアンケートを、短大の教員を対象に81票配布(回収は56票)。対象とした短大は、生活科学科と初等教育学科からなる。

結果 生活科学・社会科学系では、主テーマとはしていないが、環境問題を事例として取り上げている講義が9割をしめる。人間の生活のそれぞれの場面が環境の問題と関連していること、および個人のモラルの自覚や実践の定着が求められることが取り上げられている。デザインや造形系では、快適な環境のデザインを考えさせること、その材料選択を通し、地球は有限であることに気づかせる教育がされている。初等教育や自然科学系(特に物理学・統計学)では、専門と関連づけにくい・専門領域の優先・時間数が少ないなどの理由で環境問題を取り上げないものが多い。語学では、環境問題をテーマとしたテキストの利用など、関係づけられている場合もある。調査から、環境問題は多分野の講義で取り上げられているが、部分的・断片的な場合が多いことが明かとなった。環境問題を体系的・総合的に扱った、環境教育の必要性があるといえよう。